

Title	神谷不二先生の想出
Sub Title	
Author	小笠原, 高雪(Ogasawara, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.10 (2009. 10) ,p.140- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20091028-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神谷不二先生の想出

神谷不二先生の講義を初めて受講したのは昭和五十四年の秋であった。当時の政治学科は日吉に国際関係の専門科目を二つ開講しており、一つが先生の国際政治論であった。先生はノートの類を一切持たず、満場の学生に向かつて理路整然と講義をされた。

先生は政治とは何かという問から始め、いくつかの概念を確認したのち、国際政治に切込んでいった。先生は政治における権力的契機を重視されたが、その分析視角は国際政治のあらゆる事象に対して一貫していた。特定の勢力を頭から敵視したり、あるいは美化したりする態度と、先生の講義は無縁であった。それゆえ先生の講義は爽やかだったし、先生の視角に必ずしも共鳴しない学生たちをも含めて、多くが先生を尊敬していた。

こうした授業をつうじて私は国際政治を学問的に論ずる仕事に魅力を感じていった。三田に進むと同時に先生のゼミに参加した。ゼミは輪読が中心だったが、なかで

も印象に残っているのは E・H・カー、ジョージ・ケナン、ルイス・ハレーなどである。楽しみは先生のコメントだった。複雑に絡み合った問題を鮮やかに切り捌いてゆく先生の手腕に、私たちはしばしば圧倒された。

大学院に在籍中、先生から手取り足取り的な指導を受けた記憶はない。先生はしかし、ときに鋭い言葉を発して研究を方向づけて下さった。やがて私はインドシナ研究に着手したが、対象の今日的な意義にいまひとつ確信を持ってないでいた。そのような折、先生は私に「キンシンジャーは二冊の回想録を書いています。朝鮮戦争以外にコリアは何箇所でもきましたか」と質問された。他人の基準に振り回されるなどという御趣旨であったのだろうが、不意の指摘に驚いたことを記憶している。

シンガポールで研究を始めた頃から、先生とのコミュニケーションの主要な手段は手紙となった。近況をお知らせしたり、抜刷をお送りしたりすると、先生は必ず返信を下された。青インクで淀みなく綴られた文面は堂々たる達筆で、筆致は漢文の素養を漂わせていた。構成や配置のセンスも絶妙だった。かざられたスペースに、いかにしてエッセンスを凝縮するか、そのことに常に神経を研ぎ澄ましておられたのではなからうか。

平成四年の春、金沢にある大学へ赴任しようとしていた私は、先生から念入りの注意を受けた。金沢はかつて旧制四高の置かれた北の都であり、四高はヨシコウではなくシコウである、というのがその眼目だった。先生は名古屋の旧制八高の御出身だが、同校は四高から遠征してくる南下軍としばしば対戦したという。往時を語る先生のお顔は生き生きしていた。私はこの「四高の町」で、先生を寿司屋や骨董店に御案内する機会を得た。

私は駆出しの当初から、自分が学生に与える注意の多くが先生の受け売りであることを自覚している。「どんなことでも世話になったら礼状を書け」「結論の明瞭でない論文を書くな」「報告の制限時間は必ず守れ」等々。それは現任校に移ってから変っていない。今年の本務のほかに三田でも講義を担当している。偶然にも先生が授業をされていたのと同じ第一校舎の二階の教室である。一月の下旬、先生から御手紙をいただいた。何年かぶりのお叱りの御手紙であった。返信の文面に頭を悩ませていた矢先に先生の訃報に接した。痛恨の一語であった。先生の求められたことにいつか必ずお応えしたい。

山梨学院大学教授 小笠原高雪

インテリジェンスの人

神谷先生の論説を読み返して、その驚異的な分析力と先見性を再認識した。一九九〇年のイラクのクウェート侵攻に対して、依然として「希望（空想）的平和主義」が残る日本では、戦争は起きないという観測が多数派だった。先生はそれに組せず、「政府も戦争に備えよ」と警告されたが、生かされなかった。

冷戦の終焉によって、国家に代わってNGOや個人その他のアクターの時代が来るといった楽観論がもてはやされた時もこれを排した。冷戦終焉と時を同じくして登場した、ポール・ケネディ（『大国の興亡』）らのアメリカ衰退論にも反論し、その底力を指摘された。対テロ戦争では、タリバンを打倒してイラク戦争を始めようとしていた二〇〇二年秋にアフガニスタン問題は軍事力だけでは解決できない、イラク戦争は「大量破壊兵器の危険性を考慮に入れてもあまりに大胆な賭け」との評価だった。